

国文学科創設百周年記念行事のご報告

棚 田 輝 嘉

二〇一九年、国文学科は創設百周年を迎えました。これに関するご報告はすでに様々なところでしておりますが、本誌も百号を迎えるということで、改めて「国文学科創設百周年」関連事業の中でもメインとなった「国文学科百周年記念特別講演会」について、当時主任として関わった者として、ご報告をさせていただきます。

この講演会は二〇一九年十月六日に実施されました。本学国文学科会会員・OG、国文学科・日本語コミュニケーション学科在学学生、さらに本学教職員及び一般の方など約三八〇名もの参加者がありました。

「日本人なのに日本語がわからない、日本人だから日本語がわからない」というタイトルのもと、「第一部」では本学の山内博之教授（日本語教育）による「日本語クイズ

に挑戦！」という会場を巻き込んだ日本語の不思議に関する講演、同じくルカーシユ・ブルナ准教授（日本近代文学・比較文学）による「翻訳を通して日本文学の面白さを学ぶ」という、グローバル化をテーマの一つに掲げる本学科らしい、日本文学の翻訳に関する講演がおこなわれました。

「第二部」では、古今亭文菊師匠をお招きして、日本語の面白さや不思議さに関するご講演と、それに関わる落語を拝聴いたしました。

普段とは違う日本語をめぐる体験に、皆様、感銘を受けただようでした。ここでは、学生の感想をいくつか挙げさせていただきます、当日の雰囲気をお伝えしたいと思います。

*山内先生の話を聞いて、一つの文章に二つの意味が含まれる文章はとても興味深かった。捉え方を少し変えることで全く反対の意味になることはとても面白いと思う。また人によって捉え方も変わると思うので、そこも日本語の面白い点だなと思った。

*日本語の使い分けの違いは、私たち日本人は日本語のネイティブであるため感覚的に使い分けられることが出来るが、日本語を母語としていない外国人からすると、この使い分けを理解する、またはこの使い分けを日本人同様の感覚として身につけるといことは、とても難しいことであると思った。

*山内先生のご講演は大変興味深く面白かったです。五文字の単語のアクセントが主に「ドミミドド」のような感じであるというお話を聞いて、自分の地元である愛知県では「ドミミミミ」のような感じだなと思いました。

*ブルナ先生の講演は、第二言語として日本語を学ぶ先生と、第一言語として言葉を覚えていくお子さんのエピソードが印象的でした。

*「伊豆の踊子」「不如帰」の二作品を通して、日本と外国語の翻訳では、文化の違いが見られるということか

ら、人間が日々あやつっている「言葉」は文化など、人々が生活している環境に基づいているということを改めて感じた。

*ブルナ先生は、日本語を第二言語とする立場から文学作品の翻訳に関するお話しをされていて、英語と比較することで、日本語独特の表現がどこに隠されているのか明確になっていくのがとても興味深かったです。

*文菊師匠の話を聞いて、落語と国文学で学んだことが似ているということが分かりました。言葉を掛けるだけで人を笑わせることができるのはすごいと感じた。

*古今亭文菊師匠の落語で、山内先生の二つの意味がある日本語のように、二つの意味を利用したり、イスラム・フランスなどの面白い小話もあるのだなあと感心しました。

*今まで落語に触れたことがなかったが、文菊師匠の落語を聞いて、落語の面白さに感動した。日本語の魅力、面白さが詰まっているのが落語なんだと思う。

特別講演会后、本学九階の食堂で懇親会が催されました。ここにも約二五〇名の参加者があり、盛会の内に幕を閉じることが出来ました。

百周年記念事業を行うにあたり、早くから委員会を立ち上げてご尽力くださった国文科会の皆様にあつく御礼申し上げます。同会のご協力なくして記念事業は出来ませんでした。また、会員の皆様から多大なるご寄付を頂き、重ねて御礼申し上げます。

さらに、本事業にご協力くださった本学教職員の皆様にも御礼を申し上げます。

末筆ながら、皆様の末永いご多幸をお祈り申し上げます。

(たなだ てるよし・実践女子大学教授)